

---

# 元禄無責任鼠　　屋根裏忠臣蔵

水色ペンキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

元禄無責任鼠 屋根裏忠臣蔵

### 【Zマーク】

Z3411E

### 【作者名】

水色ペンキ

### 【あらすじ】

元禄の世に江戸の町を震撼させた赤穂事件。その裏には、江戸城本丸天井裏に産まれた一匹の鼠の数奇な一生が絡んでいた。義理人情には分厚いが、底なしに無責任な当事鼠の語る、二つの事件の真相とは。

(前書き)

携帯では読みにくいかもしません。またちょっと読みながら注意ください。

エー、ときは元禄十四年、ところは江戸城松の廊下、お名前は浅野内匠頭、お年は数えで三十四、お相手は吉良上野介、御罪状は刃傷、御処分は切腹 ごほん、じほごほ。

なんの話かって？ ちいとお待ちくださいな。こほん。お茶。喉に来るね。わしももう年だからね。

さて、人の世に忠臣蔵というものがござります。ご存じ赤穂のお殿様、浅野内匠頭長矩が勅使饗応指南役、吉良上野介義央の指導怠情を不服としまして、抜刀禁止の江戸城本丸、大名小名おん旗本らのゆきかう松の廊下にて、いきなり白刃これを振るい、アツ、何をする、殿中でござるッ、内匠頭ご乱心、出合エーッ、アーッ、ギャーッ……なんでしたつけ、そう、刃傷沙汰に及びまして、内匠頭切腹、赤穂藩お取潰し、上野介お咎めなし、と御処分が下されたのが十有余年前のこと。この事件、いちじは巷間の噂を独り占めしたものでしたが、そこは大江戸、人の心も移ろいやすく、入間川の流木、はた大川の土左衛門か、ひと雨過ぎてふつかぶか、どこぞへ流されてしまりますれば、誰もそのあつたことを覚えておらぬといった次第で、半年もすれば人の口に上ることも絶えてなくなつております。しかし赤穂の浪人どもはこれを怨として許さず、ひそかに復讐を志して各地に潜み、果たして翌年の暮れ、雪の師走の本所松坂、元藩士四十七名による吉良邸討ち入りと相成ったのはご存じの通り。浪士首尾よく上野を討ち取りまして、即刻出頭、年開けて如月の梅花の下に、ことごとく腹を捌いて泉岳寺に葬られた、ということになつておりますな。

しかしそれは人間の話。実はわたくし僭越ながら齡二十の化け鼠でござります。この呪わしい身となつてのち、わたくしなん十人という方々とお話しする機会がございました。あなたもそのお一人でござります。そのうちに、ひょんなことから浪士事件のあらましを

伺いまして、あれつ、知つてゐるな、身に覚えがあるぞ、これは人の事件でなく鼠の事件じゃあるまいか、なんてね、思い至つたわけなんでござりますよ。そもそもわたくし、それまでこの身が妖怪となつた理由すらともに考えたことがございませんでした。それがこの話を聞きましてね、ああそういうことか、それならわかる、と初めて合点がいった次第です。それこそ蛤を呑わせるように、ぴったりと、ね。その話をいたしましょう。

こほん。

人いうところの元禄じゅうし、わたくしは物心もなく江戸城の天井裏に棲みついておりました。それもあの松の廊下、浅野内匠頭が乱心めされたあの廊下の天井裏に、でござります。

わたくし当時はまだほんの若鼠でして、日々澆刺と天井板の上を駆け回つておつたのでござります。ところが出来物腫れ物ところ構わずとはよく言つたもの、たとい少食の鼠といえども、あの催しを迷れることはできんのですな。そこでまあ何といいますか、ふと催してはちょいと出す、まあ鼠ですから、そんな気樂さをよいことに、あのときも天井板の隙間からこづね、ぴゅっと、やつたわけなんですよ。あんまりお上品な話ぢゃございませんが。

それが廊下で話をしていた吉良、梶川の真ん中に落ちた。上野介ちらと天井をみましたが、わかつたもので、「ああ、鼠の小便」とひと言だけ仰られた。しかし巡り合わせが悪いとはこのこと、そのときちょうど吉良に話しかけようと浅野内匠が脇に控えておつたのです。のちのち聞けばこのふたり、たいへん仲が悪かつたそうでござりますな。さて内匠頭、自分のことをいつたと勘違いしたのか、これをきいてとたんに激昂いたしまして、やにわに刀を抜いて上野介に斬りつけたのでござります。一場騒然、上へ下への大騒ぎ。わたくし流石にしまつたなアと思いましたが、珍しげなる人間どもの大立ち回り、折角だからと面白おかしく眺めておつたわけなのですが、ふと気がつけば、鼠が発端と吉良梶川にはばれておる。こいつは猫が増えるわいと、その日のうちにわたくし江戸城を出奔いたし

ました。中天懸かるはまだうら細い三夜の月、暗いお堀の水面には撒いたように星芒のかげが映つて、たまに息を継ぐ鯉の大口だけがトップンとそれをかき乱しておつました。実にじつに静かな晩。わたくしあの夜に感じた寂寥の念は、もう一度と、しみつたれた話はやめましょう。で、石垣の合わいに沿つてトトトと走りまして、北桔梗門へゆくと橋が上がつてゐる。やあ魚に食われるのも勘弁と、こうべを返して平川橋まで参りまして、そこを渡つて江戸城を下向いたした次第でござります。

その後の暮らしは危ういものでござりました。江戸の町は猫が多いぞいます。それはもうあの軒下、この縁側、横丁に土塀に瓦の屋根まで、猫の影をみないところはもつないといってよろしい。ほかに犬もおります。鴉もおります。いや実際わたくしもね、あの江戸城の暮らしがすぐに恋しくなつたものです。少々猫が増えたところで、この憎げな禽獸どもの跋扈する瓦の上下よりはどんなにか安逸であつたことか。世の中甘くみておつた。しかし颯爽と飛び出した手前、そう易々と國に帰るわけには參りません。そこはあなた雄の意地。わかるでしょ。そして實に半年になんなんとする放浪ののちに、あるお屋敷に軒を借りることと相成りました。それがどうした因縁か、あの吉良上野介の住処だったのです。

吉良屋敷は快適でございました。広すぎず狭すぎず、蔵も豊かで食つには困りません。またあの家には大きな猫がありましてね、鼠ならぬおかたには判らないかもしませんが、強い猫は鼠の友なのです。いや友というのは言い過ぎですが。というのも、そういう猫は広い繩張りをひとりで見て回ります。いきおい監視に隙ができる。二匹三匹の猫があるより、昂然とした一匹の阿呆のほうが御しやすいのですな。それと吉良の屋敷には当然ながら、すでに鼠の住人がおりました。江戸城の鼠らとちがつてちょっと細面のね、姓は知りませんが、というか姓なんぞございませんが、要するに吉良邸根生いの一族でござります。この鼠どもがちょっと変わつておつた。

鼠は家々を渡るものでござります。むろん棲み家も持つますが、

勝手都合に気分次第、三年と同じ所に留まるものではございません。しかるにどこの屋根裏でも出入りのはげしいのを常としますが、この吉良の家、不思議なことに、もう五年ばかり一族郎党で家のぐらやみを守つておつた。居心地がよかつたのでしょうか。珍客はこの者らに追われるか食われるものと決まっておつたのです。ところがある晩現れた一匹の伊達鼠、姿凜々しく背筋が伸びて、長い尻尾は稻のよう、將軍家お膝元の江戸城で幼時身を養つておつた高邁不抜のますらおを見たのだから堪らない。わたくしのことですよ。さすがは彼ら高家の鼠、礼儀や格式といったことにはことのほか煩い。よくぞいらっしゃつと迎え入れて、まつたき客人待遇でございました。ただわたくしが此処に住みたいと申しますと、さすがに彼らも渋りました。客人、それはチュツとばかり難しい、云々。

やあここも所詮は仮の宿かと観念いたしておつたといふ、拾う神ありとはこのこと、一族の長老某が割つて入つて、わたくし含めて一座の者にこう仰いました。

「ものどもわしから提案がある。わしらがここに棲みついでよりはや一十余年代、病いには弱くなり、智慧膂力においても芳しかりざる者が多くなつた。かつてわしの爺さんの爺さんの爺さんの爺さんがここに尻尾を下ろしたとき、縄張りを守るために血族の結束を固めたのは結構じゃつたが、もはやその血も濃くなりすぎた。ここから外から新しい種を入れ、枯れ木のごとくなつたわれらの力に、新しい芽を継いでみてはどうかと思うが、いかが」

これはあなたね、分かるでしょう。雄にとつてこれほどの冥利はございません。なにせ、その、ねえ、血を改めるにはいろいろと……また、ひと番いだけでも仕様もなく……、いえすいません。なんにせよ、わたくしパツと顔が明るくなりましたね。そこにあつた雌鼠どももそうでござります。そりやあ相手がこのわたくしでござりますもの。逆に雄らは一様に暗い顔をいたしました。まあ天井裏なんぞ元から暗いんですが、黒い顔をますます黒くしましてね。気持ちわかりますよ。気持ちだけは、ねえ。

さてそののち雄鼠だけの評定と相成りました。若い雄らはもう長老に噛みつかんばかりで、いえものの例えじやありませんよ、実際鼻の辺りに喰らいついたのもおつたのですが、折角の雌をなぜ余所者と分けにやあならん、あの娘はどうなる、この娘はどうなると、侃々諤々、いつ果てるとも知れぬ紛議。その幕を引いたのは、ある一匹の提案だつたのでござります。いわく、

「このお城者が本当に我々より優れているか知らん。よしあつてないならば、いかでこの者の血を入れる必要がありましょうや。ここはひとつ、この者の力をとくと吟味したうえで、我らの新しい代を拓ぐに値するかどうか、じつくり判するのが至当ではござませぬか」

長老列席うんづと頷く。弁者は続けて、

「そこで提案にござれる。この家には猫が一匹居り申す。あやつめを謀つて、首の鈴をちよいと掠めてくるところのはいかがであつて天井裏がどよめきました。そりやあそうです。猫から鈴を奪うなんて、並の鼠にやとんと無理、これは畢竟わたくしに死ねと仰せになつたわけだ。

長老驚いて口を開きかけたが、一座盛り上がつてそれが善いそれが善いと、もう抑えられるものではございません。ややあって静まつて、ようやく長老の声が通つた頃には、もつ論の大勢は決しておりました。しかしあたくしも知恵にかけては一廉のもの、それなりの自負がござります。ひと言釘を刺しましたよ。

「一族迎え入れの儀おん取り決め、この尻尾にかけて心より感謝いたし申す。ときに猫鈴の件、無論早々に手に入れて御覧にいたしますが、このままでは簡単につきいささかお手前方に申し訳ない。ここは少々やり方を変えて、鈴取りの競争としてはいかがであろう。すなわちわたくしが先に鈴を取ればわたくしのしおおせ、お手前がたのいづれかが先に鈴を取ればわたくしの負け。すぐこの家の去りましよう。なにご心配なく、お手前がたもわたくしも、よもや猫に獲られることなどありますまいからな」

からからと笑つて見せましたが、天井裏にわかに静まりかえり、雄鼠衆も長老も、氣でも違つたかといふうにわたくしを見詰めました。してやつたりというものです。

さてそれからはわたくしも、吉良邸屋根裏の立派な半人前と相成りまして、さほど不自由ない暮らしを始めたこととなりました。なにせお互い本氣で猫に挑もうなどとは考えません。やあ猫があつちにおつた、ほおそちらへは近づかぬがいいね、一事が万事この調子。いずれ首輪の付け替え時に、代えの鈴でも奪つたろうかなんて他愛のないことを考えて、ただ平穀なる日々を送つていたわけでござります。ああ半人前といいますのは、さすがに約束も果たさぬままに、勝手に一族の雌と交わることはさすがに憚られたので。そこはわたくしきつちり律しておりましたよ。

ところが世の中難しいもので、くらあい暗い柱の影なんかに居りますと、暇な雌が寄つてくるんですね。向こうからです。断じて私からではございません。ねえ城鼠さん、ちょっと口元とこを口ウしてくださいませんか、あいよ、コウね、ソウソウ……。わたくしも群れの中に居りますから、いろいろと付き合つてこつものもあつたのです。むげにはできない。結局あつちでチヨイチヨイチヨイ、こつちで隠れてチヨイチヨイチヨイと、秋が過ぎて冬を迎えるころには、わたくしの毛並みを受け継いだ可愛らしい仔鼠達がタタタ、トトトと天井裏を走り回るようになつておりました。雄鼠からの不興を買いましたね、さすがにね。

「約束が違うぞ。鈴を取らねば群れに入れることは出来ぬと申したではないか。それがこの有様、なんとしてくれる、城鼠」

冬の評定で激昂したのは、わたくしにあの条件を突きつけた雄でございました。

「まあ落ち着くのだ。群れに混じつてながく暮らせば、避け得ぬ始末なのはわかつておる。もともと無理な仕事を命じたのがわるい。お主らの中で、お城さんより先に鈴を取つたものもなかつたではないか。試みたものすらないと聞く。ここはいつそ水に流そう。見て

おれ。あと二月もすれば、城鼠の子らも立派な雄雌となる。各自そ  
やつらからあたらしい相手を見つければよいではないか」

長老はそう仰いましたが、大見得を切つて引き受けた身といたし  
まして、わたくしやはりこのよつた仕儀は不本意でございました。  
しかし弁ずる手だてがございません。結局チコウチコウ文句をいう  
雄鼠らを抑えきれぬまま、その日の集会は解散となつたのでござい  
ます。あとにはわたくしと長老の一匹だけが残りました。長老の仰  
るに、

「なあ城鼠さんよ、このよつたのは残念至極、しかし  
わしはあんたさんに感謝しております。あんたさんの血が入つて、  
われらにも元気な子らが産まれるようになつた。これであと何代か  
はわしらも安泰じやうひ。もう半年も我慢なされば、あんたさんの  
曾孫くらこまで活力が広がりましょうし、そうなれば文句をいうも  
のもきつと、きつとなくなるはず」

とのこと。しかし見通しが甘かつた。あくる朝から雄鼠ども、わ  
たくしを見かけると歯みついてくるよつになつたのですな。彼我の  
溝はとことん深く、溢れる怨嗟は隠しようもありません。とても半  
年待つなんて、とてもとても、とても。

そんなか、あの事件が起つたのです。どんな事件かつて?  
ええ長老がですな、不甲斐ない雄らに代わつて、自分が鈴を取つて  
くると言ひ出したことあります。もちろん皆々止めましたよ。わけ  
てもわたくし、このわたくしの為に長老の身に危険が及ぶのは我慢  
がなりません。しかし長老耳を貸さない。よいかあんたさんは今は  
かたき、あんたさんと鈴を争つこのうえは、口を挟むことまかりな  
らん、といつぱりしゃり。吉良屋敷屋根裏一族の長として、今般の争  
いにきつぱりとした決着をみせようといつのです。ひとことで言え  
ば死ににいつた。鈴を奪うのは到底無理、それを皆に血らに示して、  
かつ命を失うことすべて手打ちにしようとしたのですな。ひとつば  
ご立派でござります、いえわたくしが先にゆく手もあったのですが、  
折角のお申し出、ここは遠慮するのが礼といつもの。

止めるな、どうせ長くない、ええい離せ。叫んで暴れる鼠の声に感づいて、猫も最初から気を張つておった氣色。抑える旨の足を振り切つて、老鼠とは思えぬ力強さであんと床を蹴りますと、長老待ち構える猫に向かつて疾風のように飛びかかつてゆきました。

ぽん。

猫め、跳んだ長老の躰をなんなく前足ではたきました。みじかい四肢がむなしく伸びて、木の字になつてくるくると宙を回転するさま、もう糸の切れた凧のように自由が利かぬ様子。ぽかんと開けた長老の口が、事ここに窮まつた老鼠の遺憾を遠田にもよく表していました。南無ニ。

ひつくり返つて落ちるとひか、猫めまつ赤な口をおおきく広げて、その首の辺りにぱくりと喰らいついた。こいつ。いやあな音がしましたね。猫は長老を咥えて得意げにわれらのほつを窺いました。首に巻いた赤い紐に白銀の鈴がぶら下がつて、たおやかにチリチリと揺れておりましてね、且だけで笑つた猫めの顔が、ほんとうに憎らしかつた。

ああなぜこのよつたな不仕合わせが起つるのでしょ。實に鼠が貪欲だからでござります。自制が不足しているからでござります。それに比べて長老のあの高潔さ、この群れを統べるに足る唯一といつてよいほどの人物、いや鼠物でしたのに、いまその長老ははしなくも一塊の肉となつて、猫の舌を潤しておるのでござります。慚愧に堪えぬとはこのこと、わたくしも雄鼠らも一様に自らを恥じ、その場を退きました。

この出来事を機に、わたくしと家鼠らは和解いたしました。ともに長老の遺志を無駄にするまいと思いかわして、あたらしい血族の一員としてこの屋敷に棲むことを得たのです。しかしそうしておつたのでござります。

わたくしと同じ執念に囚われた鼠はほかにもおりました。どだい

無理とは思いつつも、もしや、いや、あることは、いや。智慧を集め  
ちゃそれじゃあいけない、猫を眺めちゃだらしたものかと、日夜そ  
のことばかり考えて、屋根裏お蔵に縁の下と、ありとある場で相談  
するようになりました。その数わたくしを除いて実に四十六匹。次  
第に策は固まりまして、あとは実行するばかりと相成り、それが元  
禄十五年のあの日、師走十三日のことでございました。

その策とはこうです。どのみち力じゃ敵わぬ相手、数で押すしか  
ございません。四十七匹で奇襲を掛けて、あわよくば鈴を奪えたら  
よいなあ、と。

そんなものでは策とは言えぬ？　あなた所詮は鼠の智慧、これを  
思いついただけでも立派なものです。それに相手も所詮は畜生、ひ  
とが相手じゃございません。ええ、申し忘れましたが、献策はどう  
せんこのわたくし。

そこでわれわれ文字どおり一丸となつて物陰に隠れまして、縁側  
の猫に飛び掛かる機会を窺つたわけでござります。しかしこの一丸  
といふのがいけなかつた。四十七匹の鼠玉、チュウチュウチュウチ  
コとともにかく煩い。黙つておるとこうことができません。とうせん  
猫に感づかれて、奇襲どころの話ではなくなつてしましました。や  
っこさん、いつでも来たれとせせら笑つて、悠々と毛繕いしてござ  
つしゃる。ほんとうに憎い奴。結局ひるまは機会を得ずしに、戦いは  
月の下へと持ち越しどなつたのでござります。

日が落ちて家人が寝静まりますと、師走の夜ははげしく冷えこみ  
ました。それもそのはず、この晩天から白いものが降つて、はつび  
やく屋町の瓦の上を、一夜にしてまつしろに染め抜いたのでござい  
ますから。さて猫めはどうしたか。このけものは寒さをたいへん嫌  
います。畢竟ゆくところは決まっておつて、まあ家人の布団のうえ、  
あるいは中、だれかの使う火鉢の脇に、かまどに蓋した鉄のうえと、  
要するに暖のあるところに限られてくるわけでござります。わたく  
し以前から猫のあしどりを子細に調べておりまして、この夜はきっ  
と吉良上野の息子義周よしちか、このときすでに当主となつておりましたが、

その布団に潜りこむものに相違ないと当たりをつけおりました。

伝令に残した若い雄と一匹、天井裏で待つこと数刻。夜半を過ぎて、場所を誤ったかと諦めはじめた頃に、果たして猫はやつてまいりました。隙間から覗くとやつこさん、じぶんで障子をすすすと引いて、開いた僅かな隙間から、するりと蛇のように座敷に入った。そして当主の布団にどつかと座ると、そのまま丸くなつて寝てしまつたのでござります。しめしめ。

すぐに伝令を遣わして、吉良屋敷生え抜きの四十五士を呼び寄せました。しかしいざ大敵と戦うとなると、さすがに皆も氣後れするのか、ぜんいんこ汚い灰色の顔をしております。わたくし僅かなれどもこの場の士気を盛り立てんと思いまして、旨を前に慣れない口上など述べたものです。

「ここに集う勇士四十七名、これより猫に喰われたる長老の無念を救い、鈴を奪つてわれらが不徳の忌むべき呪いを雪がんといたす。これはわれわれの名誉の問題でござる。各位よろしいか」

チユウ。

「なん鼠も無駄に命を捨てるこトまかりならん。では、ゆくぞ——

どん。どじん。どじどん。

そのときです。にわかに屋敷のどこから、聞き慣れぬ低い大音がおこりました。あとで聞けば太鼓というものであったそうです。一同驚いて鼻をつき合わせ、動搖は火のようにわれらの間を走りました。これはよからぬ気配です。

下でもばたばた音がしました。見れば当主がはね起きて、布団を蹴立てて座敷をでるところ。畳の上に猫がころがる。一体これは何事じや、しんぱち、やしち、起きてあるか……、当主たいへんな剣幕で、鼠の身にも尋常ならざることが起こったのはじゅうぶんに知れました。しかしわれらに大事なのはあくまでも鈴のこと、人の世間は人に任せておけばよろしい。猫も騒ぎに驚いて、耳を立てて慎重に外の音を窺っている様子。いまだツ、いましかないツ。

わたくし天井板をずらしますと、チユウと鳴いて勢いよく猫の背

に向かつて飛び降りました。残りの者も慌てたように、一斉にあとに続きます。ぼたぼたぼた。猫の奴さすがに驚いたか、にやあと鳴いて飛び退りましたが、わたくしとあともう一匹、間髪をおかずしてその左右から躍りかかった。ああ、その素早いことといつたら！失礼。誰か一匹が鈴に喰いつき、それを千切れればわれらの勝ちです。のけぞった猫が鮮やかに腕を振るつて、途端に一匹の背が血を吹きました。それを囮にわたくしが懷に飛び込む。ところが恐るべき猫の俊敏、見上げる間もなく毛の屋根が跳ねて、一瞬にして元の木阿弥、その口には早べつの一匹が咥えられておりました。見回せばいつの間にやられたものか、既に傷ついたもの三四匹。ああ何という豪傑か。多勢をもってかかればどうにでもなるといつ田論見、どうやら甘かつたようじざいます。並の猫ならば逃げ出してもおかしくない状況なのに、この本所の猛虎、そもそも十人並みの猫でないことをぽつかり忘れておりました。

猫めが咥えた鼠を投げ捨てるど、ぼとりと無情な音がいたしました。からだじゅうの毛が逆立つて、高い唸りも凄いよう。飛び掛かる鼠の群れを両の腕で巧みに捌き、そのたびに一匹また一匹と毛皮を切り裂かれて、勇ましい同士らが置のうえに倒れ伏す。さしものわれらも怯みました。殺戮の酸鼻なこと、攻めるに敵わず、退くにも退けず。猫の眼光にねめつけられると、若い鼠は躰がもう思うようには動かない。さあどうする。

この危難を救つたのは、なんと吉良の当主でした。ばたばたばたと凄まじい足音があこひて、薙刀を振り回す吉良義周が後じさりに座敷に入つてしまつたのでじざいます。追うのは揃いの火事装束に櫛がけの賊ふたり、白刃を閃かせて土足で踏み込んでまいります。はげしく置を踏む勢いに、われらの躰もぽんぽんと跳ねて、こうなつてはもう猫や鼠の争いどころではございません。みな一様に驚いて、置の上を豆を落としたように八方に散りました。しかしその刹那、わたくしは見たのでござります。横ツ跳びにすつと伸ばした猫の首、そこに首輪がない、とうぜん鈴も下がつておらぬのを。思え

ば確かにあらそこの間、鈴の鳴るのを聞きましたでした。これは、迂闊。

それでは鈴はどうなのか。誰かがすでに取ったのか。しかし首輪「」と取るなどと云ひます、齧にできよつけはずもござりません。では元から巻いておらなんだか。とすると此処で斃れた者どうも、まつたくの犬死に、いや鼠死にであったのか。

いやそのようなことを思い悩んでいたときではございません。猫は庭のくらやみに消え、ここには用がなくなつた。家じゅう人が叫びたて、長居は危険を増すばかり。すぐに近くの一匹を捕まえ、会う鼠会う鼠に天井裏へ戻るよう伝えると命じました。そしてわたくし鈴を探して、いつぴき人間の足を縫つて狂乱の吉良屋敷を走り出したのでござります。

縁側に出て驚きました。そこには壁敷のものが賊と切り結んでおります。斬り伏せられて倒れるもの、畳の上でうめくもの、なんとまあ美味そうな血よ肉よ。いやそれはよい。駆けて回つて猫の好みそうなところを探しますが、上野の寝所に鈴はどうぞいません。台所のあたりにもございません。玄関先にも廁にも、池の脇にもそれらしきものはなかつた。はて困つた。こりやあ埒があかない。ちよいと一休みしてやりかたを考えようにも、氣を緩めれば途端に踏みつぶされんばかりの大騒ぎ、あぶなつかしくて足を止められません。わたくし息を落ち着けようと、騒々しくない一隅を求めて、ある一室の障子紙を破りました。

三畳の小部屋でございました。月明かりに障子が青い。廊下を駆ける何者かの影が、ふきみに揺れつづはげしい喧噪を伴つて、ときおりその上をとおり過ぎてゆきます。つら若い女中がふたり、布団のつえでがくがくぶるぶると震えておりました。お氣の毒です。

わたくしそ一つとその脇を通りぬけまして、食えるものはないかとまず部屋のなかを嗅ぎ回りました。これは鼠の性でござります。するとどうだ、壁ぎわの長持のつえあたり、とろんとした甘い臭いがする。飴もあるかとそのつえに飛びのりますと、いかにも安

物の鏡架の脇に蛤を含ませた膏薬入れがありまして、妙な臭いはそれから漏れておりました。そしてそのむこうに あつた、あつたのです、うすい光にちらりと輝く丸いもの、まさしくあの鈴、猫の鈴。奴め、首の皮に腫れ物でもできたのでしょうか。女中のだれかが首輪をといて、そのままここに置きはなしたものらしい。

しめた。女中どもは気づいておらぬ。

わたくしそおつと鈴を検分いたしました。かねの丸みに一筋の切れこみがはいつて、その逆がわに小さな輪がひとつついております。そこに廻糸を通して首輪にまわし、なんどか巻いてぶら下げるしくみ。人間ども、かようにむつかしいものをよう作るなど感服いたしましたな。ただ問題はそれをどう屋根裏までもつて帰るかということ。首輪から鈴を切り離さぬと、鼠が運ぶにはこさか大きい。糸、切るべし。

さつそく囁きうといたしましたが、鈴のあたまと首輪のあいだ、この糸じつにみじかく巻いてございまして、口がその間にうまく入りません。よつ、だめか、やつ、だめか、鈴と紐とに両手をかけて、ぐいと押し分け頭を突っ込もうかとしたときです。鈴がちりりと鳴りました。鼠の鳴き声よりもっと小さな音でしたが、それをきいて、怯えておつた女中らが文字通り飛び上がつたのでござります。ぴよん。

女ども、おたがいの後ろに隠れんともみ合いまして、まぬけな面してともども倒れたところ、もの音に感づいた賊がひとり、襖を蹴倒し躍りこんできたのでござります。とたんに悲鳴があがりました。つづく怒号、誰何のこえ。あまりの騒ぎにわたくしも仰天いたしまして、首輪の端を口に挟んでとにかくその場を逃げ出しました。

鈴つきの首輪はたいへん重うございました。咥えてみればこの紐ただの紐でなく、こよりか針がねでも縫りこんだものか、なかなか固うございます。そして悪いことには鈴は鈴、わたくしが走りますと紐の中途中で盛んに跳ねて、ころころとけたたましい音をたてる。これには辟易いたしました。

天井裏への登りくちはあまたございました。軒の端などはもとより、押し入れのなか、あまり使わぬ廊下の暗がり、天井の高さの変わり目の角など、目立たぬところに鼠穴を穿つて、人の見ぬ隙にそろり、そろりと出入りしているのがわたくしじもの常。ところがこう大荷物を抱えていては、柱をまっすぐに駆けのぼつて入るような穴はつかえません。さてどこから上がったものか。あそこは駄目だ、そもそもむつかしい、そう考えながら走り回つておるところ、思つてもみなかつた困難がわきおこつてまいりました。

賊どもでござります。まがまがしい争いもいつしか下火になつて、ふすま障子を蹴倒しながら家搜しをしておる様子、鎧せりあいに擲たれた大きな提灯が垣根のそば、池の脇などでちろちろと燃えあがつてはおりますが、屋敷の中にはこれといった明かりはございません。くらやみに伏兵がいつ飛び出すかと戦々恐々としておるところ、かげもなく鈴の音ばかりが疾風のようにおそいかかつて、足の間を抜けてまたたく間に飛び去るのだから無理もない。驚きついごめく味方のかげを、すわ敵かとお互い飛び退り抜き身をかまえ、誰ぞ、名乗れと呼び掛け合つて、吉良かッ、違うッ、上杉ッ、違うッ、山ッ、川ッと、おうッ、おうッと、まつたく人間とはじつに愚か愚かしいものでござりますなあ。

ところがそう面白がつてもおられません。ちんちんちりりと鈴をころがし、あちらの座敷、こちらの廊下と走り回るうちに、さすがに賊らも追つ手をかけた。万が一にも人間に捉まるへまなどいたしませんが、こちらも逃げ道をさがしておる最中、邪魔をされるのは面倒だ。そこで人のあまり入らぬようなところ、台所ちかくに炭小屋というのがござります、ふだんはまつ黒い木の棒など詰め込んでおる他愛もない部屋でございますが、そこへ逃げ込もうかと思つた。

炭小屋の戸は閉まつておりました。しかしもともと建て付けがわるぐ、角のあたりには少々隙間がござります。そこに鼻を突つ込みまして、中の様子を窺いますと、あれつ、おかしなことに人とくろ

がねの臭いがする。だれがあるなと思った矢先、埃っぽい戸板がすーっと動いて、ちょうど一寸ほど開いたのでござります。

誰か、きたか。いいえ。

囁きが聞こえました。するとわたくしを迎えるために戸を開けたわけではなかつたのですな。しかし感づかれておらぬならそれに越したことはない。追つ手の熱がさめるまで、つしろのほうに隠れどころを借りようと思いまして、人の足元をするつと掠めて中に入らせていただきました。いたのは三人、くらくて顔がたちまではわかれませぬ。

おい、なんか足に触つたぞ。

失礼、紐の端でもあたりましたかな。

向こう隨分と騒がしいな。

そうでございましょうなあ。

来る、こちらへ来るぞ。

はて、鼻のいいのがありますかな。

どたどたと騒がしい足音が近づいてまいりまして、賊めら、この炭小屋のまえで止まつたようでございました。

ちゅうざえもん、この中は調べたか。いや、まだだ。

外から太い男の声が聞こえました。ああ面倒な。鼠がこのように餌のない場所に逃げ込む道理がありますか。あつちへいってくださいな、しつしつ。

ちりん。

小さな鈴の音が、せまい小屋の中に透き通るような音色を奏しました。中の三名がびくりとした。小さくおい、ふざけるなどいうその声が、慌てたように震えています。こんな大きな団体をして、たかが鈴の音におどろくとは、まったく人とは臆病な生きものでござります。しかもその声、どうやら外の賊どもに聞こえたようだ、かたびらの鳴るじゃらじらといづ音が近づいたかと思うと、ついにこのささやかなる隠れ家は暴露されてしまったのでござります。ああ、なんたる迷惑。

月の光に打たれた刹那、腹に響くおうという掛け声とともに、内の二人が刀を振るつてとび出しました。閃く刃が宙に躍つて、がつきと打つたびに黄色い火花が弾けます。凄まじい剣戟、見るからにあぶない遊び。しかし賊らもさるもの、しばらく防御に徹したのに、突然だんと踏み込んで攻勢に出ると、またたく間にふたりを斬り伏せてしまいました。

まだ誰かあるか。

肩で息する賊の一人が呼びかけましたが、明かりなくば向こうからこちらは見えぬようございます。わたくしこれ幸いと奥に入つて、息を潜める最後のひとりのそのまたうしろに隠れました。

ちりん。

おい、おるなら名乗れ。見苦しいぞ。

鼠に名乗りは無用でござります。そもそも名がない。

ちりん。

じゅ「づじゅ」、ひとつ槍で突いてみよ。はつ。

これを聞いて、わたくし入り口に向き直りました。誤つて刺されでは面白くありません。人の仕草は鈍づいたりますから、突き出すところを見ておれば、切つ先をかわすのはそうむつかしいことではございません。少なくとも、いつもわたくしであれば。

しかしここに不運がございました。わたくしの前に間抜けがおったのです。青じろい庭を背にして槍を構えた賊の姿が、ゆらりとたち上がつたまつ黒い男のかげに、急にかき消されてしまつたのでござります。ちょっと、困りますよ、ねえ。

槍が見えねば避けられぬ。わたくし慌てて男のかげから逃れようとしました。そのときずぶり、肉をうがつ生々しい音が聞こえまして、折角たちあがつた人かげが、早くもぐらりとよろめいた。ほら、いわんこつちやない。

貴様ら、あさのの、

しほり出すような上野介の声がいたしました。なんとこのお隠れ入道、吉良上野介その人であったのでござります。

主君に似て、本当に、おろかな、

刺せツ、こづけやもしれぬ、

この、いなかざむらい、

まだ手向かうかツ、

ただでは死なん、吉良上野介義央とは、わしの、ひと、  
脇差しの鞘がわたくしの目の前に落ちまして、からからからと  
吃驚するような音をたてました。この期に及んでひと戦のつもりと  
は、上野介も元気なもので。面白いみものが始まるかとは思いましたが、ふと思えばわたくしも重い荷物をかかる身。この場が人  
間どうしの争いとなつたのは僥倖と、ひとつお先に退散させていた  
だくことにした。はず、だつたのでござります、が。

わたくしが上野介の足元を抜けようとしたそのとき、この老人き  
ゅうに足を踏み換えて、首輪の端を踏んでしまつたのでござります。  
咥えた紐がぴーんと張つて、わたくし釣られてのけぞつた。あつ、  
ちよつと、のいて

ずぶり。上野介に一の槍が入りました。老人のからだがよろめいた。よろめきましたが律儀なもので、紐の上で踏ん張つた足はあげ  
ぬのです。わたくし必死で首輪を引っ張りました。しかし人の重さ  
にはかないませぬ、どうしても取れない。引いても捻つても鈴がち  
やらちやら騒ぐだけ。

困つたぞ、と思つた刹那、上野の足が奇妙な感じに浮きました。  
とたんに紐が抜けまして、わたくし後ろに転がりました。ところが  
しめた、と思う間もなく、まっくろいかけが急にわたくしに覆いかぶさつて、鈴や首輪もろともわたくしを押し潰したのです。ぎゅ  
う。そして間髪をおかずに繰り出された三の槍、わたくしはみて  
おりませんので、たぶん、が、上野介とわたくしとを、ともども  
串刺しにしてしまつたのでござります。こほん。

そうしてふと気がつきますと、わたくしこの化けものの姿になつ  
ておつたのでござります。ただわたくし畜生ではございましたが、  
それほどこの世に未練があつたわけではございません。さて、なぜ

妖怪などになつたかな、なにかこの世に怨みでもあつたかな、あるいは恨みを買つことあつたかな、と考えましたが、とんと心当たりが「ございません」。長らく不思議に思つておつたのが、おいおい人と話していろいろと事情を知るよつになりました、ああこれは上野介の呪いじや、赤穂一派の暴挙を恨む上野介の恨みつらみが、ぐづぜん共に死んだわたくしに乗り移つて、わたくしをこのような妖怪にしたのだと思い至つた次第でございます。とことん迷惑なはなしですな。しかしまるで「縁のない居候であつたわたくし、そんなわたくしをこれほど頼つていただけるとは、なかなか悪い氣はいたしません。

いまではわたくし上野介の供養をかねて、たびたび人を喰らうのが習わしなつてあるのですよ。とくに噂話がお好きなかたがた、わけても赤穂の敵討ち、これを喜ぶ人の肉など、実に甘露のように美味でござります。こうして吉良義央の無念を雪いでゆけば、いざれわたくしも真つ当に成仏できる日を得ることでしょう。なかなか心たのしい余生ではございませんか。

え？ 極楽往生はむり？ この無償のはたらきをもつてしても？  
「冗談を。え、吉良上野の怨念をわかつとらんと？」 いえいえ、そんな。「安心くだされ、みなさま土壇場ではわけのわからぬ事をおっしゃるものでござります。ええ、ここまで人間の方々はみなそつでございましたから。さて、あなたもちよつとばかり痛いのを我慢してくださいます。さればいづれはわたくしの血肉となつて、ともに浄土の花を足下に踏みしだくこともできましょう。

ああ、喰われついでに、お茶をもう一杯いただけませんか。  
あとで口をすすぎますので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3411e/>

元禄無責任鼠　屋根裏忠臣蔵

2010年10月8日15時28分発行